

## 第百二話 官軍が始めた戦争を賊軍が終わらせた！

文春新書 半藤一利編・解説「なぜ必敗の戦争を始めたのか 陸軍エリート将校反省会議」を読んだが、その「余話と補話—あとがきに代えて」に面白い個所があったので紹介しよう。以下同書 315p～316p を引用

『・・・、昭和 16 年 12 月に大日本帝国が対米英戦争をはじめる時の海軍中央の陣容を見ると、エッと驚くことがあるのです。何と薩長出身の対米強硬・親ドイツ派の連中で固められていたのです。永野軍令部総長の高知（土佐）出身を筆頭として、まず山口県（長州）出身は左の如し。

沢本頼雄海軍次官、岡敬純軍務局長、中原義正人事局長、石川信吾軍務第二課長、藤井茂軍務第二課員。

鹿児島県（薩摩）出身者も多いのです。高田利種軍務第一課長、前田稔軍令部情報部長、神重徳軍令部作戦課員、山本祐二同作戦課員、さらに大野竹二戦争指導部員も父親（伊集院五郎海軍大将）が鹿児島出身者でした。

第一委員会（筆者注：後述）のメンバーのほとんどが親独派の薩長出身、これに対して、対米協調派の強力トリオの米内光政が盛岡、山本五十六が長岡、井上成美が仙台で、いずれも戊辰戦争のときの賊軍派出身の面々。これに加えて鈴木貫太郎も千葉県関宿の出身で賊軍派です。「“官軍”が始めた戦争を昭和の戦争を“賊軍”が終わらせた」といって、よく識者に笑われるのですが、あながち出鱈目をいっているわけではないのです。』

注：第一委員会とは、昭和 15 年 12 月 12 日、海相の認可を得て海軍中央に「海軍国防政策委員会」、略称「政策委員会」が設けられた。この政策委員会は 4 つの委員会により構成されており、その中心が、国防政策や戦争指導の方針を担当する第一員会である。

委員には海大首席卒業の恩師の軍刀組も補職されている。メンバーには駐米経験者がただ一人しかいなかったという。（上掲書 312p から）

以下 Wikipedia による。

『主要なメンバーは富岡定俊（当時軍令部作戦課長、大佐）、大野竹二（当時軍令部、大佐）、高田利種（当時海軍省軍務局第一課長、大佐）、石川信吾（当時海軍省軍務局第二課長、大佐）の 4 人である。

軍令部の機密を扱うため作戦室を使用し極秘裏に審議したが、決定機関ではなく権限は極めて曖昧であった。非常に閉鎖的であり、例えば物資動員や出師準備の担当である軍令部第二部第四課長の栗原悦蔵元少将が自分も出席する必要がある旨主張し資料を抱えて会議に入ろうとしたら富岡定俊に「あなたは入る必要がないんだから」と制止されたという。権限がないため過激であり、しかし永野修身（当時軍令部総長）は会議の席でも居眠りし作戦計画に鋭い指摘を飛ばすこともなく、「これは第一委員会でパスしたのか？」「よかろう」と第一委員会の報告書を無批判に採用し、1941 年には海軍の政策決定はほとんどこの委員会の下固めにより進んで海軍は一気に開戦に向けて動くこととなり、これにつき鳥巢健之助（元中佐）は海軍反省会でこの委員会が「むちゃくちゃに戦争に持って行った」「魔性の海軍」と強く批判している。』

\* 鹿児島出身の小生としては心苦しきところ大であるが・・・

\* 陸軍はドイツ式の軍制を取り入れており、親独が多いのは解らないでもないが、海軍側にも、枢要な部署に斯くも多くの親独派が居たことは驚きでもある。米英或いは独の何れと協調・提携するか国家百年の大計を見失ってはならない。現代においても同様だ。自由主義国際社会の一員として振る舞うか、覇権を目指す国家に近づいてお零れに与らんとするか何れが真つ当なるか自明であるとは思ふ。

（第百二話 了）